

第1回「海軍の歴史勉強会」要旨
—太平洋戦争Ⅰ（海軍の二つの対米戦略）—

1 戦前の日米両軍の対相互戦略

米海軍の戦略は、「太平洋の戦略概観」から「基本オレンジ計画」に示されるように、重要な海上補給路遮断、海軍と経済生活に対する海と空からの攻撃による孤立化、海軍を中心とする攻撃的戦争計画で、フィリピン奪回を目指し、それにより日本を打倒する戦略であったのに対し、日本陸海軍統帥部「帝国軍ノ用兵綱領」に示されるとおり、日本軍は、漸滅邀撃作戦での艦隊決戦論で、米国打倒は考慮外の来攻米艦隊撃破戦略であった。太平洋戦争におけるその実際は、米軍は戦略通りに比奪還を果たし日本打倒に2ルート（マッカーサー、ニミッツの各ルート）で北上したが、日本軍は初期において二つの対米戦略（山本の連続攻勢主義による太平洋の東攻並びに軍令部富岡の米豪連携遮断）で動き、後半には漸滅邀撃作戦を実行することが出来なかった。

2 日米の開戦

開戦理由に伴い、援蒋ルート遮断、戦争資源（石油等）の獲得、対南方資源地帯作戦の側面援護（真珠湾攻撃）、及び意図の不明瞭な南下作戦の4つの進攻作戦が進められた。この時の海軍の対米方針は、連合艦隊山本の主張するハワイ奇襲と軍令部富岡が主張するグアム・ラバウル攻略の二つに分かれていた。山本の戦略は、連続攻勢主義による講和機会の獲得にあり、富岡の戦略は、井上成美の思想を根底に持つオーストラリアを米軍に使わせない戦略であり開戦時より路線の違いが露呈していた。

3 オーストラリア進攻論の挫折

S17.3.7の大本営・政府連絡会議において、海軍部富岡は、オーストラリア進攻、米豪遮断のF S作戦の実施を主張し、陸軍部に対し5師団の提供を要請するが、陸軍はこれを拒否し次善の策として海軍だけでMO作戦・F S作戦実施を要求する。

戦後のアーレイ・バーク少将が、「なぜ日本はミッドウェーなぞを攻略しようとしたのか。それよりも日本は、珊瑚海海戦に引き続き、連合軍側の海上兵力の弱体と無防備に乗じてソロモン、ニューカレドニア、フィジー、サモアの線を攻略し米豪遮断をやり、・・・」と疑問が呈される通り、正鵠を射た海軍部富岡の考えに対し、突如非論理的で思い付きとも思われる山本のミッドウェー作戦が浮上して来る。しかもそのミッドウェー作戦は、それまでの珊瑚海海戦等の戦訓を生かすこともなかった。

4 島嶼戦の展開

豪州を拠点とするマッカーサー麾下の南西太平洋軍は、当初日本軍に比べ小規模部隊であったが統合軍であった特性を活かし日本軍に反攻できた。また、島嶼戦の原点は航空機による制空・制海権獲得を企図しており、航空戦主体による消耗戦へと突入するのであった。米軍の陸海空戦力の一元化に対し、日本軍はどの組織レベルでも陸海軍並列で不効率な戦力発揮に陥った。

ここで、マッカーサー軍の侵攻は、今後もっと脚光を浴びても良い史実を残しているのです、今後の研究に注目したい。（次頁講話資料に続く）

太平洋戦争 I 〈海軍の二つの対米戦略〉

H.Tanaka

1. 戦前の日米両軍の対相互戦略

①米海軍；「太平洋の戦略概観」提出(1923(T12).4)

「基本オレンジ計画」作成(1924)

(1)陸海軍、「陸海軍統合作戦計画ーオレンジー」作成(1924)

- a. マニラ湾の確保
- b. 日本が占領する島々・フィリピンの奪取
- c. 日本にとって死活的な海上補給路の支配
- d. 日本の経済活動に対する海と空からの攻撃

※日本の重要な海上補給路遮断、日本の海軍と経済生活に対する海と空からの攻撃による孤立化、海軍を中心とする攻撃的戦争計画

※フィリピン奪回を目指し、それより日本を打倒する戦略

(2)クーンツ米艦隊司令長官の「オレンジ Oー3 計画」(1924)

「5000 マイル・ノンストップ作戦」…… 5000 哩=ハワイ~フィリピン
日本の比島攻撃→米艦隊ハワイ集結(3百隻、3百機、7万上陸軍)、
2週間以内に出撃

②日本陸海軍統帥部、「帝国軍ノ用兵綱領」(T12)

米國ヲ敵トスル場合ニ於ケル作戦ハ左ノ要領ニ従フ。

海軍ハ開戦ノ初期ニ於テ速ニ東洋ニ在ル敵艦隊ヲ制圧スルト共ニ、陸軍ト協力シテ呂宋島及ヒ「グアム」島ニ在ル敵ノ海軍根拠地ヲ破壊シ、敵艦隊ノ主力東洋方面ニ来航スルニ及ヒ、其途ニ於テ逐次ニ其勢力ヲ滅殺スルニ務メ、機ヲ見テ我主力艦隊ヲ以テ之ヲ撃破ス。

=====> 漸減邀撃作戦・艦隊決戦論

③日米戦略の相違

米 軍；日本打倒戦略、その一環としてフィリピン奪還策を考究

日本軍；来攻の米艦隊撃破戦略、米国打倒は考慮外

太平洋戦争における実際

米 軍；フィリピン奪還……豪州→ニューギニアから出撃

日本の海上補給路遮断；陸軍中心の南西太平洋軍実行

日本打倒……M・Nの2ルートで日本へ北上

B29、航空攻撃で本土焦土化・海上封鎖

日本軍；(初期)二つの対米戦略、(後半)漸減邀撃作戦実行できず

連合艦隊…連続攻勢主義で太平洋を東に進攻

軍令部……オーストラリア攻略による米豪連繫遮断

2. 日米の開戦

①開戦理由に伴う4つの進攻作戦

- (1) 援蒋ルート遮断 ; タイ → ビルマ
- (2) 戦争資源(石油等)の獲得 ; (フィリピン) → マレー → 蘭領インド
ハルを中心とする国務省の日本の政策転換への期待
S15.7.31 西半球以外への輸出禁止 → S16.7.25 石油輸出全面禁止
タンカー積禁止 → (日)ドラム缶輸入 → ドラム缶輸出禁止 → 木樽入
- (3) 対南方資源地帯作戦の側面援護 ; 真珠湾攻撃
- (4) 意図の不明瞭な南下作戦 ; グアム → ラバウル → ニューギニア

実際の戦況

フィリピンを除く作戦は予定通り・予定以上の成功
真珠湾奇襲作戦の歴史的「大成功」

山本の及川海相宛書簡(16.1.7) ; 「開戦劈頭敵主力艦隊を猛撃撃破して、米国海軍及米国民をして……其の士気を沮喪せしむ……」

連合艦隊参謀長草鹿龍之介回想 ; 「ただ一太刀と定め、周密な計画のもとに手練の一太刀を加えたのである」

アメリカの動員・戦備立ち遅れ、英蘭本国の苦境をついた攻勢
マッカーサーの豪州後退 → 南西太平洋方面軍発足(S17.4.18)

②海軍の二つの対米戦略

海軍の開戦時における二つの対米戦方針

連合艦隊山本の主張……空母機動部隊によるハワイ奇襲

軍令部富岡の主張……南洋部隊・南海支隊のグアム・ラバウル攻略

山本と富岡の路線の違いが開戦時より露呈

- (1) 山本 ; 米国に立ち直るスキを与えない連続攻勢主義 → 講和機会獲得
- (2) 富岡 ; オーストラリアを米軍に使わせない戦略

富岡の予想 ; アメリカの戦力は、二年たつと膨大なものになる計算だった。……飛行機は十倍になる。艦船も十倍になる。しかし、いくら十倍になっても、米本土やハワイにひしめいているかぎりひとつも怖くない。ことに飛行機は、それが戦力を十分発揮できるように基地に展開しなければ意味はない。この戦場で格好の展開場所を探すと、太平洋では豪州しかない。北からの道は鎗のように細いし、インドに出てくるには、欧州の戦場を通して地球をひと回りしてこなければならぬ。この大きな戦力が、広大な豪州に展開してドッと北に突き上げてきたら、ちょっとかなわない。どうしても豪州を早く脱落させるか、アメリカとの間を遮断しなければならぬ。……無謀かもしれない。が、いったん戦争が始まった以上、相手をやっつけて勝たなければならぬ。勝つためには、どんなことがあっても敵に豪州の使用を許してはならない

のだ。敵がまだ準備できないうちなら、豪州をとることもできる。このままずるずると二年経ち、アメリカが飛行機をどしどし注ぎこんで豪州をフルに使いはじめたら、おそらくその物量に対抗できなくなるだろう。 (『太平洋戦争と富岡定俊』)

(3) 作戦実施；海軍陸戦隊主体、一部を陸軍南海支隊協力

ラバウル占領(17.1.29)→ニューギニア・ソロモン攻略作戦下令(1.30)→ニューブリテン・ガスマタ上陸(2.9)→サラモア・ラエ上陸(3.8)→ショートランド・ブカ上陸(3.30)→マヌス上陸(4.6)→ポートモレスビー(MO)作戦(5.5)

③ 富岡戦略の根底にある井上の思想

井上成美『新軍備計画論』；航空機発達と艦隊決戦必然論への疑念

殊ニ航空機、潜水艦ノ異常ノ発達ハ、戦争ノ方式ニ大ナル変革ヲ来シツツアリ……航空機ト潜水艦ノ活躍ニ依リ、米ノ主力艦ノ如キハ西太平洋ニ出現スルヲ得ズ、艦隊決戦ノ如キハ米艦隊長官ガ非常ニ無知無謀ナラザル限り生起ノ公算ナシ……日米相互ニ争フ領土攻略戦(※島嶼戦)ハ日米戦争ノ主作戦ニシテ、此ノ成敗ハ帝国国運ノ分岐スル所ナリト言フモ過言ニ非ズ、其ノ重要サハ旧時ノ主力艦隊ノ決戦ニ匹敵ス……旧時代ノ海戦ノ思想ノミヲ以テハ、何事モ之ヲ律スルヲ得ザル……

『新軍備計画論』の意義

航空機の発展と運用法について正しく認識

富岡所論；井上の航空部隊進攻、艦隊決戦論否定と共通

日米ともに航空機による制空権→制海権獲得を模索

(日)海軍航空隊追求、(米)陸軍航空隊→海軍航空隊も追求
島嶼部飛行場使用→制空権・制海権エリア獲得=新しい進攻撃

※日本機の低パワー・小搭載力で実行できたか疑問

山本五十六「真珠湾奇襲作戦計画」

空母部隊による敵地進攻構想がない時代の画期的発想

空母機動部隊への評価が劇的変貌

空母部隊で遠地進攻可能実証→制空権・制海権奪取

成功の一因に奇襲の成功→空母機動部隊への過大評価に

井上の基地航空論とは大きな隔たり

米海軍；空母部隊による制海権・制空権奪取法を確立

日本海軍；攻勢勢力としてのみ活用

※ (井上)・富岡と山本の相違

航空戦力の主体は「基地航空隊」or「空母航空隊」か

③「大東亜戦争第二段作戦 帝国海軍作戦計画」(17.4.16)

作戦目的；所要ノ戦略要点ヲ維持シ帝国不敗ノ戦略態勢ヲ強化確立シ以テ英国ヲ屈服シ米国ノ戦意ヲ破摧スル

作戦方針；(一)速ニ西亜作戦ノ進展ト呼応シテ情况許ス限り「セイロン」島ヲ攻略シ英印間ノ連絡ヲ遮断シテ独伊トノ連繫ヲ確保ス
(二)濠洲ニ対シテハ米英トノ遮断作戦ヲ強化スルト共ニ濠洲方面敵艦隊ヲ撃滅シ其ノ屈服ヲ促進ス

※(二)に関する作戦要領

①濠洲東岸及北岸要地ニ在ル敵兵力軍事諸施設ノ粉碎

②陸軍ト協同シ『フィジー』『サモア』『ニューカレドニア』ヲ攻略シ右地点ニ潜水艦及航空基地ヲ整備シ米濠間ノ海上及航空路ヲ遮断

③諸般ノ情勢之ヲ許セバ濠洲攻略作戦ヲ企図スルコトアリ

※米濠遮断とF S作戦準備

4. オーストラリア進攻論の挫折

① S17.3.7 の大本营・政府連絡会議

海軍部；オーストラリア進攻、米濠遮断のF S作戦の実施を主張

富岡；オーストラリア進攻のため5個師団提供を要請

陸軍部、反兵理的として絶対反対(大陸戦こりこり)

富岡；「豪州の都市はみな海岸沿いだからこれを進攻する。そしてサッと引揚げる。へばりつくとは砂漠で手を焼くから、オーストラリアを脱落させて米国に反攻の場を与えないようにするのだ。」で説得

陸軍の拒否……大陸の泥沼戦に嫌気、積極論なし

当初5個師団計画→10個師団に修正→兵力捻出不可能

兵力に見合う輸送船の確保、作戦継続に必要な補給能力に自信なし→太平洋戦線では強気の発言なし

海軍；次善の策としてMO作戦・F S作戦実施要求

「関係各部と議論したり、折衝をしたが成功しない。海軍だけでオーストラリアを攻略できないので、やむを得ず、ガダルカナル島とポートモレスビーに出る一方、西はビルマをやることにしたのだが、……ここに大きな壁にぶつかった。」

；陸軍反対で豪州進攻あきらめ

豪州進攻論は自然に沙汰止み、具体的計画に発展せず

代案としてガ島・ポートモレスビー攻略→米濠遮断企図

；F S作戦準備、富岡述懐；「フィジー、サモアなどの飛び石がある。この飛び石をとるとハワイから航空兵力を注入出来ない

んです。……そして豪州にあきらめさせようとかかった。」
「大きな壁」出現＝連合艦隊司令部のミッドウェー島攻略作戦
※戦後、アーレイ・バーク少将の疑問

「なぜ日本はミッドウェーなどを攻略しようとしたのか。それよりも日本は、珊瑚海海戦に引続き、連合軍側の海上兵力の弱体と無防備に乗じてソロモン、ニューカレドニア、フィジー、サモアの線を攻略して米濠遮断をやり、これに日本の得意の潜水艦の前進基地を置いて、これを更に有力な空母機動艦隊で支援していたなら、米国は航空機を一機も濠洲に進出させることができず、対日大反攻の基盤を持ち得ないことになって非常に困ることになった。」

山本のミッドウェー作戦……思いつき・非論理的

現場機関が要求する構図に問題

→自分の現場を最重要と思込み、全体を俯瞰できず
富岡の構想を永野修身軍令部総長がトップダウンできない(しない)リーダーシップの無さに大きな問題

②珊瑚海海戦とミッドウェー海戦

a. 珊瑚海海戦(17.5.7-8)……ポートモレスビー進攻作戦の一環

史上初の空母機動部隊間戦闘 → 初出の戦訓多数

予想外・意外の戦訓、近時の戦訓ほど早急の対処必要

※黄海海戦二十五周年記念晩餐会での東郷揆揆(S4.4.8.10)

「日露海戦艦隊戦闘は此の八月十日の黄海々戦は初めであり、此の海戦によりて多大な経験を得たる因り、日本海々戦に全勝を獲たのであります。故に東郷は黄海々戦が根本であると固く信ずるのであります。況んや黄海々戦は今申す通り初めての艦隊戦闘で、彼我の情勢もあの通りであり、此方から見れば未だ経験も浅く、十分に行届いたといふ訳には行かなかたのであります。それが此の黄海々戦の経験によりて改良に改良を加え、方策を案し工夫を凝らし、訓練を重ねたから、日本海々戦にあの様な全勝を獲ることを得たので、黄海々戦が根本だと深く信ずるものであります。

(「有終」No.21-7)

連合艦隊司令部；第五航空戦隊無能を原因と決めつけ

→ きわめて粗野な非科学的態度

五航戦・原忠一 → ~~戦訓~~ → 南雲一航艦司令長官

動き回る敵艦隊発見の困難(索敵の重要性)

敵機は空母しか狙わず→戦艦・巡洋艦の役割激変

艦隊陣形の根本的見直しの必要

手強いのは敵機の雷撃でなく急降下爆撃

※航空機用無線機の非実用性→日本軍全体の致命的欠陥

※マレー沖海戦で活躍した陸攻機群の低調

米国；戦訓の徹底的検証→艦隊陣形の抜本的改編 } 革命的
艦隊防空・索敵強化 } 転換

空母中心の作戦方針と艦隊陣形の転換を決定

※「未知の経験」に対する日米の相違

英米の経験主義 → 事例の徹底検証 → 対策施行

大陸合理主義→合理的理論構築→理論に基づく方針

b. ミッドウェー海戦(17.6.5) 戦訓無視の典型ツケ

日本；単縦列を基本形（日本海々戦時代と変化なし）

空母集中(団子状態)、索敵軽視、艦隊防空に工夫なし

空母の団子状態 → 一度に3隻の空母がやられる主因

珊瑚海海戦で警告された急降下爆撃に対する対策なし

米国；輪型陣の空母護衛態勢、空母を分散 → 危険の分散

防空強化、索敵強化、沈没はヨークタウンのみ

山本；連続攻勢主義・空母機動部隊による攻勢の破綻

基地航空隊に重心転換→「い」号作戦の遂行

③ SN作戦計画の実施

内容；豪州進攻構想の断念 → 代わって米豪連携遮断策

空母航空戦力→基地航空戦力に主軸移転

SN作戦・FS作戦による航空基地網展開→制空・制海権圏域形成

ニューギニア・ソロモン→フィジー→サモアに拡張

島嶼獲得・飛行場設定→航空機による制空・制海権→米豪遮断

ミッドウェー大敗後、FS作戦無期延期、SN作戦計画だけ残る
実施(S17.6 発令)；ニューギニア各地、ラバウル東・西、ラエ、ケビエ

ン、ツラギ、ガダルカナル等15箇所に航空基地設営

連合艦隊、第五空襲部隊ツラギ配置→敵の妨害排除

飛行場設営能力が戦況に影響 → 人力設営による長期化

ガダルカナル島飛行場完成→米海兵隊の飛行場奪取(S17.8)

※陸路ポートモレスビー攻略作戦の実施(S17.7)

軍令部作戦課の強い要求→SN作戦とは目的相違

陸軍南海支隊の無惨 → 航空機能力の格差顕著

ソロモン海戦……ガ島戦に伴う戦闘、島嶼戦下の艦艇

海上；航空機活躍・魚雷多用 → 駆逐艦活躍

島嶼上；航空隊・飛行場中心→消耗戦→補給戦→駆逐艦活躍

燃料・弾薬・部位部品、設営機材の補給、作戦の長期化
 駆逐艦の活躍→損失多大、駆逐艦の消耗戦化
 ※米海軍；真珠湾～ソロモン海戦後までの建艦計画の手直し

真珠湾戦後	護衛空母 21 隻を主に 298 隻建造
珊瑚海海戦後	空母建造に転換→エセックス空母 11 隻に 戦艦モンタナ級、大型巡洋艦アラスカ級建造中止
ガ島戦後	戦艦建造さらに削減、空母建造全力、駆逐艦 300 隻大量建造追加、第 1 次上陸用舟艇建造
上記追加 43.2	駆逐艦 72、護衛駆逐艦 205 の追加建造

4. 島嶼戦の展開

①豪州を拠点とするマッカーサー麾下南西太平洋軍の反攻

マッカーサーの豪州退避・反攻基地化で事態一変

米英連合参謀本部 (CCS)；太平洋方面・南西太平洋方面に分割

太平洋方面……ハワイのニミッツの太平洋艦隊司令部

南西太平洋方面…豪州のマッカーサーの南西太平洋軍司令部

※太平洋の大部分を米海軍に、太平洋片隅をマッカーサーに

実際の戦況；太平洋の片隅の島嶼部が戦闘の中心 (S17 後半～19 夏)

マッカーサー軍、豪州を部隊集結・発進・補給の拠点化

航空機の改修・メンテナンスの基地化

マッカーサー軍のための補給支援機能強化

「オーストラリアの国民所得の約一割五分、したがってオース

トラリアの生産資源の一割五分がアメリカの要求に応じ振り

向けられた」(ウィロビー『マッカーサー戦記 I』)

※富岡の予想通り＝豪州産業が作戦を支援することまで予想できず

※マッカーサーの不満；米国の戦争資源の大半→ヨーロッパ戦線に

豪州の農業・工業の戦時態勢化→南西太平洋軍に軍需品補給

②米豪軍の反攻作戦と島嶼戦

米豪側が受けた脅威

ポートモレスビー進攻作戦 → ポートモレスビー喪失の危険

S N 作戦にガ島飛行場設営 → 米豪遮断の危険性

両脅威への対抗はマッカーサーの南西太平洋軍の役割

南西太平洋軍；二つの作戦実施に増援部隊要求し難癖

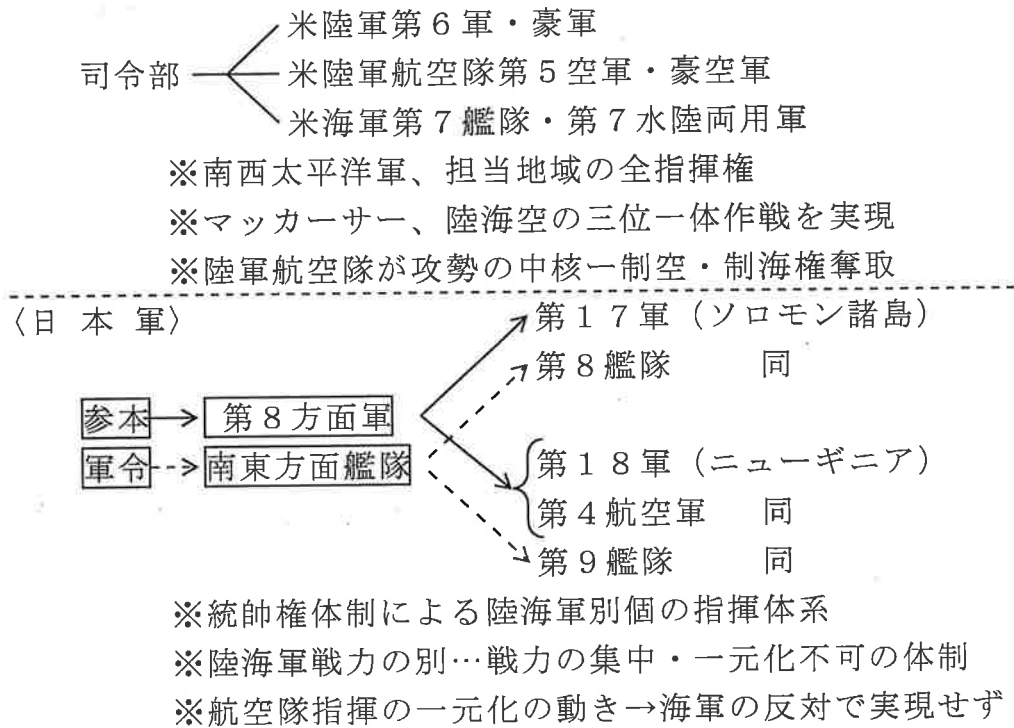
対ポートモレスビー戦のみに従事

太平洋方面軍；やむなくガ島戦に従事→艦隊と海兵隊の連携で対処

両軍の作戦……カートウィール作戦に発展

島嶼戦の展開

カートウィール作戦の米軍と日本陸軍（第17・18軍）の戦闘
 攻勢の米(豪)軍と守勢の日本軍との間で展開
 日本軍；史上はじめて陸海軍が同一地域で作戦
 (米(豪)軍)



③航空戦による消耗戦

島嶼戦の原点；航空機による制空・制海権獲得企图

飛行場奪取戦→早く飛行場完成側有利、造営能力

※ブル広告(S12,3)→国鉄5台購入、陸海軍無反応

島嶼進攻→飛行場建設→航空隊進出と作戦→飛行場争奪戦

島嶼部飛行場…空母より広大な施設

大型機離発着可能、多数機配備可能

一作戰ごとに膨大な消耗→後方に補給ライン形成必須

不動で攻撃に脆弱→飛行機防禦の唯一施設

狭小の飛行場、少ない掩体施設、薄い対空火網

米軍、S18年秋までマック型島嶼戦、その後ニミッツ型も

飛行場→制空権延長→陸海空戦力で次の島奪取

日本軍の対応；海軍航空隊、ラバウル・ケビアンに集中→3N線阻止

長大な航続距離飛行→航空機メンテナンス負担大

陸軍航空隊、S18.3-4 ニューギニア、8.17-9 空爆で大打撃

陸上・海上・航空の部隊の統一的作戦→統帥権体制が障碍

ダンピールの悲劇が典型的事例、陸海軍別々の戦闘

※地上(海上)と機上の通信不可→連携作戦不可